

2021年度 関西大学博物館実習

雑誌名	関西大学博物館紀要
巻	28
ページ	A59-A95
発行年	2022-03-31
URL	http://doi.org/10.32286/00026429

2021年度 博物館実習

— 受講生のレポートから —

「きつね」ポスターにおけるデザインの選定と色彩の調整

文19-0576 藤井 純

はじめに

昨年11月に実施された「2021年度博物館実習展」は、コロナ禍により例年とは異なる形ながらも無事に開催された。その後の講評では、いずれの班も耳が痛いご意見を頂いたが、同時にポスターやパンフレットなど諸印刷物にはうれしい評価を頂戴した。さらに恐れ多いことに、きつね班のポスターについて「実際の展示会に使用できる」と非常にありがたいお言葉をいただいた。ポスターを担当した

身としては喜ばしい限りのことであるので、少々図に乗って、本レポートではポスターに詰めた私なりのこだわりについて述べる。

デザインの構成を探る

デザインのいろはも知らない素人が、いきなり白紙から案を生み出すのはかなり厳しい。そのため、まずは先人たちの仕事を拝見することにした。博物館にて配布していた展示チラシや、インターネット上で「博物館 ポスター」を検索した結果から、デザインの方向性を考えようとしたのである。

その結果として、展示内容によるポスターデザインの構成の違いを発見した。例えば、ある特定のテーマ、とくに作家を取り上げた展示では、その作家の代表作一点を大々的に据えたポスターであることが多い。また同種の資料を多く展示するものでは、ポスター全体に複数の資料を並べる傾向がみられた。前者は展示におけるメイン資料のわかりやすさ、後者は簡単にポスターが賑やかかつ華やかになれるなどのメリットが挙げられる。また、両者の間をとってメインとなる資料を数点中心に配置するパターンや、メインを大きく取り上げ、その周りに准ずるものを並べるパターンがみられた。

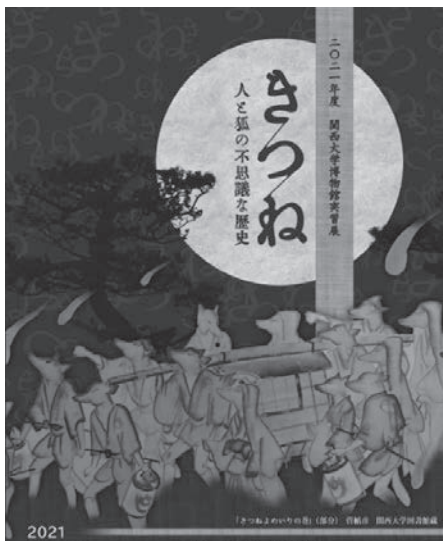


図1 「きつね」ポスター
《きつねよめいりの巻》(菅橋彦)をメインとして制作。

では、きつね班にはどのスタイルがふさわしいと言えるか。展示する資料から考えるに、お面とお守り、巻物、版画、そして本と、その種類は幅広い。材質も色味も異なるものばかりであるので、ポスター全体に全てを並べるとややちぐはぐな印象になると考えられる。さらに言えば、展示資料自体が多いとは言い難い量であるので、大量に並べて華やかさを演出するこの方法は今回の展示には難しいと言えよう。

一方、資料一点のみを取り上げる方法は、どのような展示であっても採用しやすいデザインであり、とりわけ小規模でありながらメインとなる大物がわかりやすい展示にはうってつけの構成である。今回のメインとなり、そしてポスターの中心核となる作品として、森二鳳の《稲荷狐図》と、菅楯彦の《きつねよめいりの巻》を候補とした。他の作品もそれぞれの魅力を持つが、「きつね」というテーマにビジュアル的にもわかりやすく合致し、またそのサイズの大きさゆえの見応えという観点から見ると、やはりこの二点がメインとして適当であった。

デザインの母型を練る

ある程度の主軸が定まったところで、次はそのメイン資料が映えるようなデザインを考えねばならない。ただし、あまりにその資料を重んずるデザインにしてしまうと、展示自体のコンセプトから外れてしまう可能性もある。そのため、きつねの持つ「神秘性」と「親しみやすさ」が感じられるように留意しながら、《稲荷狐図》と《きつねよめいりの巻》のそれぞれをメインとして、ポスターの大まかな枠組みを制作することにした。なお、今回の制作は全て Word で行った。

まず《稲荷狐図》を中心としたデザインである。本作品は狐の衣服や鳥居など、全体的



図2 《稲荷狐図》ポスター
その後パンフレットの表紙に流用。

に朱色が印象に残る。そして狐の並びも右肩上がりで、作品と相まって縁起の良いものとしての狐をイメージしやすい。そこで背景を白色に設定し、作品の赤と共に紅白、すなわち色彩イメージからも縁起物となるように配色した。純白ではなく、やや灰がかかった白にすることで、作品との調和を図った。それが功を奏したのか、赤を映えさせるために作品から狐と鳥居のみを切り出し、隣り合う色彩のコントラストの差を際立たせても作品が浮かずまとまったように思う。加えて、蔵に運ぶ姿を描いたものであるため、なまこ壁を意識した格子を背景の模様として配置した。格子を狐の頭の形となるように工夫したのは、若干の遊び心というものである。

もう一方の《きつねよめいりの巻》は、その作品名の通り妖怪・狐の嫁入りを描いたものである。巻物ということで非常に横に長い作品であり、力不足ゆえに全体をポスターに載せることはできなかった。だが行列の一部、

嫁入りと分かりやすいように籠を運ぶ狐を中心に切り出すことで、「狐の嫁入りが通っている風景」を表現するものとなった。狐たちが持つ提灯も点っているため、全体の雰囲気としては夜を想起させるものが作品をひき立てるには良いと考え、背景を暗色にしてやや薄暗く仕立てた。こちらでも作品とのバランスを考え、若干黄みをおびた藍色を採用し、ひょうきんな狐をイメージして「きつね」の文字を背景の模様とした。一見すると薄青の文字群は闇夜にかかる霧のように見えるので、人とは異なるものの神秘性も同時に演出できた。

これらのデザイン案を提出し、班員の投票にて選択したところ、きつね班は《きつねよめいりの巻》をメインに据えたポスターにすることが決定した。

デザインの色彩を整える

さて、どちらもそれぞれの作品の特色を生かすデザインとなるべく考えたが、とりわけこだわったのは「色」である。今回のメインとなる作品はいずれも地の紙がやや黄色く、混じりけのない白を大部分に使用すると作品が濁って見える。また、作品の尊重はそのままに、不特定多数にみられるポスターとして成立させるには重要な点がある。できるだけ多くの人にとって不都合のないように、「ユニバーサルデザイン」を意識する点である。

今回の制作では「カラーユニバーサルデザイン」の観点から、色弱者にも認識しやすい配色を心がけた。東京都カラーユニバーサルデザインガイドラインによると、白色と黄色、または赤色と黒色の組み合わせは見分けがしにくいという。そのため、作品の雰囲気を壊さない程度のはっきりとしたコントラストをつけ、見分けしやすい配色となるように整えた。また多くの人々が認識できる色の一例とし

て、青色と黄色が挙げられる。都合の良いことに、決まったポスター案は「夜」がモチーフの一つであり、すでに背景色として深い青を採用している。つまり、その二色を中心にポスターを作りやすい環境がすでに出来ていた。

では、黄色はどのように使うのが効果的だろうか。一番に思いつくのは、タイトルに文字に色を差すことである。今回の展示タイトルは「きつね 人と狐の不思議な歴史」と、メインタイトルに対してサブタイトルがやや長めであり、また字画もメインよりもサブの方が遥かに多い。そのため、その文字サイズの大きさや並びのバランス、そして色合いをおろそかにすれば、他のデザインをこだわりぬいたとしても台無しになってしまう。今回は《きつねよめいりの巻》が最も目立つように、しかしタイトルが埋もれることのないように注意を払った。

はじめに、青い背景に直接黄色いタイトルを載せた。だが、暗色の上に明色のスタイルは、タイトルだけが放り出されたように見えるうえに寒々しさを感じる。それに根本的なことを言えば、このスタイルでは重要なのは単なるコントラスト差であり、わざわざ黄色でなくとも白色でよい。黄色である意味を持たせるもの考えたとき、夜空に浮かぶ月、それをタイトルの土台として使う案を捻出した。作品よりも若干明るめの色にしたために、狐嫁入り行列が月明かりに照らされているストーリー性が生まれ、暗色でタイトルを入れてもぼやけない基盤が出来上がった。先に述べた見分けやすい配色パターンに基づいたものであれば、多少の色の遊びも可能となる。今回は、作品に描かれた提灯の模様の色とメインタイトルの色とを同じ濃い朱色にすることで、アクセントカラーかつポスター全体の統一感、そしてタイトルから作品への視線誘

導をねらいとした。

この時点で8割程度完成し、後は細かな装飾で詰めるのみである。色味を多くしすぎるとまとまりが失われるので、すでにポスターに使用した三色を中心として装飾を考えた。そのうちからカラーバランスを考えるに、青色は背景として全体に使用、赤色はアクセントであるので多用は避け、黄色と青色が1:1となるように調整するのがベストである。また、開催時期などの詳細は、タイトルと一線を画すものにするために、夜道らしく黒地に白抜きのスタイルとした。この詳細内でも、優先すべき情報はサイズを大きく作るなど、「見る人の立場に立つ」ことを重視して制作した。

以上の行程を経て、きつね班のポスターは出来上がったのである。

デザインの課題を追う

惜しむべくは、点字などの立体的なデザインは出来なかったことである。今回は印刷で表現できる限りのユニバーサルデザインは取り入れたが、本来のユニバーサルデザインとは誰にでも使えることが原則の一つとして挙げられる。しかし今回のポスターは、色弱者への配慮はしたものの、その他の視覚障害者に対する工夫というものが出来ていない。インターネットなどでの掲載では不可能であるが、会場に置かれるものであれば凹凸や異素材を張り付けることも可能であっただろう。

加えて、日本語が読めることを前提に作られており、諸外国人に対するグローバルな視点がない。特に「狐」という日本の文化と密接にかかわるものをテーマにするのであれば、エキゾチック・ジャパンを知りたい外国人や、日本文化を学びたい外国人には人気を博すだろう。ならば、英字での案内も入れたほうが良いはずであり、そしてアルファベッ

トが浮かないデザインを考えるべきであった。これらは、柔軟性の不足と来館の予測される対象を明確にしていなかったことが原因である。

おわりに

最初に申し上げたとおり、私は今までに何かをデザインした経験のない素人であった。しかし、それであっても講評にて良い評価をいただいたのは、何かにつけ相談に乗っていただいた班の皆様のご協力と、そして細部に至るまでそのデザインの意味を考えた結果によるものである。この「考える」という行為は、学芸員やデザイナーでなくとも、今後に取り組むすべての仕事に必須の力である。この実習展での経験をもとに、これからも考え続けながら邁進していきたい。

参考

東京都福祉保健局「東京都カラーユニバーサルデザインガイドライン」(閲覧:2022.1.4)
<https://www.fukushihoken.metro.tokyo.lg.jp/kiban/machizukuri/kanren/color.html>

博物館実習を振り返って

文19-0638 松本 祐香

1. はじめに

私が関西大学を志望した理由の1つに、「博物館を有しているから」ということがある。高校2年のとき、担任の先生から、「関大は博物館を持っているよ。」と言われ、中学生の頃から博物館や美術館へ行くことが好きだった私は、「大学内に博物館があるなんて、すごい!」と思い、関西大学に魅力を感じるようになったのである。その後、無事に関西大学に入学することができ、入学後は関西大学博物館の展示を頻繁に見に行っていた。1年次のときは正直、学芸員資格を取得しようか迷っており博物館学の授業は履修していなかったのだが、2年次に進級するときに、やはり博物館という施設に興味があり、また、関西大学は博物館学に力を入れていること、そして何よりも関西大学が有する博物館で実習を行っていることを知って、学芸員資格を取得することに決めた。よって、私は2年次から博物館学の授業を受け始め、他の人よりも少し出遅れた感があったが、今回の3年次で無事に博物館実習を受講することができた。このレポートでは、2年次・3年次で様々な博物館学の授業を受けてきて、その集大成ともいえる博物館実習を振り返ることとしたい。

2. 春学期の実習を振り返って

4月9日、対面形式にて博物館実習第1回目の授業（ガイダンス）が行われた。今年度は昨年度とは異なり、対面授業でスタートすることができ、良かったな、と思ったのも東の間、再びコロナウイルスが猛威を振るったことにより、第2回目の授業からオンライン形式の授業となってしまった。これからが実

習の本番、というところでオンライン形式になってしまい、悔しい気持ちもあったが、オンラインだからこそその利点を活かして、最大限に学ぶということに努めた。例えば、オンライン授業で通学時間がなくなり時間に余裕ができたことから、配信される動画を時間をかけてじっくり見るようにしたり、実習日誌を丁寧に書くようにしたりしたことである。

6月に入ると、文学部の了承を得た上での対面形式の授業が行われた。その授業で、ようやく実際に資料を触って調書をとる練習をしたり、梱包のやり方を学んだりすることができた。その中で、反省すべきことがあり、それはオンライン授業にて、資料を扱うときは必ず腕時計を外す、ということを選んでいたのでにもかかわらず、実際資料を触るとなった時に腕時計をしたまま触ろうとしてしまい、先生に指摘されたことがあった。このことがあってから、資料を扱うときはより慎重になるようにした。実習展のときも、必ず作業の前には腕時計をはじめ、資料を傷つけるものは身に付けないように徹底した。

6月の終わりからは全体で対面授業が再開された。そして、7月4日には初めての見学実習（大阪歴史博物館）が行われた。大阪歴史博物館は2回ほど訪れたことがあるのだが、このときは学芸員の方のお話を聞くことができたり、資料を運ぶときに使用する油圧式のエレベーターに乗せていただいたりと、実習ならではの貴重な経験ができた。また、7月18日に実施された2回目の見学実習では、大阪府立弥生文化博物館で来館者の行動観察をした。普段なら自分が来館者になるのだが、このときは第3者となって、来館者がどのよ

うな動きをするのかを記録し、そこから展示を評価する、ということを行った。今まで、展示を批判的に見てそこから改善案を考えるということをしたことがあったが、これはあくまでも自分の見解にとどまるものである。今回行った他の人の動きから展示を評価し改善案を考えるということは、客観性があり、より多くの人々が満足できるような改善案を導き出すことができ、このような第3者評価は非常に重要なことであると感じた。

3. 秋学期の実習を振り返って

— 実習展を中心に —

今年度は昨年度とは異なりグループでの実習展が開催されることとなり、7月9日の授業にて、実習展の班分けが行われた。私が入った班は、書道部に所属する子が何人かいて、書道をテーマに硯を展示しようか、という話で集まって結成したグループであった。だが、今年はいままでとは異なり、基本的に自分たちが用意できるものでの展示、という制約があったため、硯の案は取り下げ、まずは自分たちで用意できるものを探す、ということになった。そして夏休みに入った8月、Zoomで実習展に向けての会議を行った。その会議で、各自で用意できるものを提示し、その中から展示テーマとして成り立ちそうなもの考えた。結果、「音楽」をテーマに、録音媒体を中心とした展示をすることに決まった。当初は録音媒体の歴史を展示で紹介しようという話で進んでいたが、昨年度の実習展とテーマが被ることが判明し、また山口先生から様々な助言を頂き、レコードやCDといったモノで音楽を聴くことの魅力を展示で伝えよう、ということになった。

夏休み中は頻繁にZoomでの会議を行い、話し合いをした。その話し合いで私は、なるべく意見を言うように心がけた。これは、7

月16日に行われた「展示開発ワークショップ」という授業で学んだことがきっかけである。この授業では、実習展の班とは異なるメンバーで3つのグループに分かれ、それぞれ事前に用意された展示物をもとに、展示開発プログラムを行った。私の班に用意された展示物は、アジアの民族楽器と思われるものであったため、「アジアの楽器」というテーマで、展示のストーリーや活動などを話し合った。その話し合いで、マーケティングプランの話になったときに、私が、「グッズ展開をするのはどうかな。」と提案したところ、他の子が、「なるほど。ミニチュア楽器のカプセルトイとか良いね。」と私の意見を昇華させてくれた。私は、どちらかといえば消極的で、話を聞く側にまわることの方が多いのだが、このときは頑張って自分の提案を言うことができた。するとその提案が皆に受け入れられ、さらに私の意見を受けて様々な提案をしてくれた。このことは、とても嬉しく、また、意見を言うことの重要性を学ぶことができた。

このようなことから、実習展のZoom会議でも積極的に意見を言うようにし、また、特別展示室で実習展の準備が始まったときも、色々な提案をした。その提案は、必ずしも採用はされなかったが、私が意見を言うことで少しでも良い方向へ進むことができたと思っている。また、展示作業の時には先生方より多くの助言を頂き、展示品の見せ方に工夫を凝らすなど、より良い展示を目指した。

そして11月8日には、2021年度関西大学博物館博物館実習展を無事に開催することができた。実習展の開催期間中、私も2回ほど様子を見に訪れたが、他の学生や先生方もいらっしゃって、自分が作った展示を本当に誰かが見てくれているのだな、と嬉しく思った。と同時に、「展示は人に見られるものである」ということをもっと意識して展示を作るべき

であったと感じた。これは、講評の時にも言われたが、見る人のことを第一に考えて展示を作るべきだったということである。私の班を含め全体への講評として、パネルの位置が高い、車椅子からでも資料やパネルが見えるようにしなければいけないと指摘された。これは、実習展後の12月10日に行われた「博物館におけるデザイン」という授業で詳しく学んだが、博物館における疎外を考え、その疎外をできるだけなくすように展示を作らなければならない、ということである。具体的には、博物館を訪れる人は子どもからお年寄り、そして障がい者など様々であって、その様々な人が皆楽しめるような展示を構成していく必要があるということである。その様々な人が展示を見る、ということをして失念して展示を作ったことは反省すべき点といえる。

その他、企画部分が弱かった、という意見もあった。企画部分が弱い、というのは要するに展示を通して本当に伝えたいことが観覧者に伝わっていないということである。私の班では、ストーリーミングで音楽を聴くことが主流の現代で、あえてレコードやCDといったモノを持つことで生まれる所有感や手間がかかることで生まれる愛着などを紹介し、モノで音楽を聴くことの魅力を伝えたかったのだが、先生方の講評を聞くと、録音媒体と再生機のどちらに焦点を当てているのかわからない、という意見が多数であった。また、展示タイトルである「音楽ナウ」の「ナウ」が何を意味するのかわからないという声もあった。これは、レコードやCDといった録音媒体だけでは展示に立体感がないので蓄音機などの再生機も合わせて展示することになったのだが、現代はモノがないストーリーミングの時代であることを展示の冒頭で明確に説明しておくべきだったといえる。さらに、解説文のみでモノを持つことの魅力を紹介するの

では説得力がなく、ただの意見の押し売りのようになってしまうので、近年のレコードの売り上げ枚数のグラフや、カセットやレコードが再び注目されているということが書かれている記事など、具体的な根拠を提示しておく必要があったと感じた。

このように、実習展を通して「展示は人に見られるものであるが故、その相手のことを考えて展示を作らなければならない」こと、「伝えたいことを明確に伝えるためには土台となる企画・ストーリーをしっかりと構成し、また様々な工夫をしなければいけない」ことを学んだ。

4. おわりに

以上、今年度1年間受講した博物館実習を振り返ってきた。今年度も昨年度に引き続きコロナウイルスに怯えながらの生活を余儀なくされ、実習でも多くの見学実習や宿泊実習が中止となってしまった。だが、コロナ禍でも私たちの学びのために尽力してくださった先生方のおかげで、学芸員になるための専門知識だけでなく、礼儀作法や積極的に意見を言う、といった社会人として生きていくためのスキルも学ぶことができた。博物館実習の授業はこれで終わりだが、ここで学んだことを忘れないよう、実習簿を見返したり、日々の生活でこの実習で学んだ所作を実行したりして、博物館実習の学びを自分のものにしていきたい。また、博物館実習、特に実習展を経験したからこそその観点で、色々な博物館の展示を見て今後も新たなことを学んでいきたい。

博物館実習展を通して感じたこと、考えたこと

生19-59 殿村 明日香

1. はじめに・博物館実習を受講した経緯

私は、理系学部にも所属しており、その中でも、生命科学を学んでいる。私は、奈良県橿原市の明日香村にとっても近いところに幼い頃から住んでいる。明日香村は古い遺跡が残っていて、自転車で通える範囲に博物館、資料館が集まっている。そのような土地で育ったからか、祖父母によく博物館や資料館に連れて行ってもらっていた記憶がある。さらに小学校では地域学習として、考古学の発掘調査の見学や、学芸員の方、発掘されている方の話を聞く機会が多かった。そのため幼い頃から、博物館、学芸員の方々ととても身近に感じており、仕事内容に興味を持っていた。

しかしながら、中学校・高校と共に、京都の学校に進学し、家から学校までの距離の遠さから博物館が疎遠になってしまっていた。学校の近くに京都国立博物館があったが、学校が終わる時間には閉館していたことや、企画展ごとに訪れる人の多さに圧倒され、京都国立博物館を訪れることはできなかった。また、その他の博物館の企画展には興味があったが、実際に訪れることができず、毎度、企画展のパンフレットだけを集め、ファイルに入れて保存していた。さらに、大学進学において、壊滅的に英語と国語と社会ができなかったことから、文学部に行ける可能性がなく、学芸員になりたいという気持ちは段々と薄れてしまっていた。そして、生命科学現象に興味を持ち、関西大学化学生命工学部に進学した。

大学生になり、時間に余裕を持つことが出来るようになり、私はまた博物館へ通うことを始めた。元々博物館という空間が好きなの

ともあり、1年間で十数の博物館を訪れた。また、旅行先で博物館を見つけたら、必ず足を運ぶようにもなっていた。

そして、1回生の終わり頃、第1学舎で一般教養科目の授業を受ける機会があった。この時に、私は関西大学博物館を見つけた。この時まで、関西大学に博物館があることを恥ずかしながら知らなかった。

すぐに関西大学博物館を調べ、関西大学に学芸員課程があり、さらに文学部でなく、理系学部出身者でも希望すれば受講できることを知った。私は学芸員になるということを決めていたので、とても嬉しかったことを覚えている。次の日には教務センターに行き、学芸員課程の受講方法や注意事項を聞きに行った。この時、2回生から理系学部で学芸員課程を受講することは相当厳しいことや、博物館実習という授業が厳しいことも聞いたが、受講したいという気持ちは揺らがなかった。

以上のような経緯で私は理系学部出身という立場ではあるが、学芸員過程を受講している。

2. 博物館実習展のグループ活動通じて感じたこと

私は、博物館実習展では天保山班に所属し、「天保山～浪花の新名所～」の展示を企画した。

班内での私の担当は、当初はキャプション・パネルの担当であったが、グループでの話し合いの中で、10月2日にポスター担当へと変更になった。グループでの活動の流れは実習簿に記載したため、ここでは私が感じたこと、考えたことを述べていく。

まず、私たちのグループは、7月に博物館実習の授業内で美術品を展示するグループとして作られた。グループを作る過程で、大まかに歴史・民俗・美術、3つの中でやりたいことに立候補していく形で決まった。私は、今まで博物館にのみ行き、美術館には行った経験がほとんどなかった。しかし、学芸員課程を受講すると、博物館を大きく捉えると、美術館も含まれることを知り、美術品に興味を持ち始めていた。そこで、私は美術品を展示する班へと立候補した。

実習展を企画するにあたって、天保山班が一番躓いたと私が感じたことは、スケジュール管理と展示資料の選別である。

スケジュール管理については、誰もが当たり前にしておかなければならないことである。しかしながら、天保山班では、ほとんどのことをディスカッションで一度は議題として出していた。そして、ディスカッションが白熱するあまり、完成版としてあげた資料でも、ディスカッションで訂正が必要になることが多かった。9月までは、訂正が多くても十分に対応できていたが、10月に入ってから徐々に締め切りに余裕を持てなくなり始めた。この時、締め切りに間に合わないだろうとなった時点で班長や誰か1人の独断で話を進めても良い、といったルールを作っておくべきだと反省している。このルールを決めなかったため、締め切り前日にお昼から5時間以上のzoom打ち合わせが開催される、展示完了締め切りの1週間前に皆が予定が入っていて全員で集まることができない、最終日に解説動画が間に合わない、キャプションの校正が中途半端で時間切れが来てしまった、などという、班員全員が困る事態につながってしまった。スケジュールを管理する人を決めるか、私自身がその役割を担ったら良かったのではないかという反省点があった。

次に、展示資料の選別である。これは、単に資料を選別するというのではなく、展示を通して、観覧者にどのように伝えるのかという点が、最もディスカッションが盛り上がった。

まず、天保山班で最も良かった点は、9月の初めの段階で、時系列に沿って天保山を紹介する、そして章立ては、1章に築山・人工的に作られたことの説明、2章に繁栄・大阪の人々に親しまれた天保山の紹介、3章に軍事利用としての天保山・砲台設置のために山が削られたことの説明、4章に現在の観光地としての天保山、とすることが決まっていたことである。そして、それが最後まで全員の考えとして変わらなかったことが最も良かったと言えるだろう。全員の目標が明確になっていたからこそ、ディスカッションが白熱することができ、より良い展示を作るためにぶつかり合うことが出来たと思う。

この前提のうえで、現在では観光地となっている天保山の歴史を、美術品を用いて限られたスペースで観覧者に伝えることが難しかった。結果として、展示台の上に置くものをすべて実物資料とし、パネル資料は全て壁に貼ることで差別化すること、掛け軸を2本使う予定だったものを1本とすること、4章として考えていた構成を3章構成とし、元々の3章と4章を一緒にすることになった。他にも、キャプションの文章校正など、様々な点をディスカッションの上、工夫することが出来たと思う。

3. 博物館実習展における人との関わり、伝えることの難しさ

私個人としては、実習展を通して、最初から最後まで自分の意見を相手に伝えるという点に苦戦した。私は、普段、簡潔に必要な最低限の言葉を用いて意見を言う。これは、私が

語彙を多く持っているわけではないため、長々と話をしても同じことを繰り返すだけになってしまうため、出来るだけ短く意見を言うように心がけていたからだ。

しかしながら、天保山班でのディスカッションでは、意見を伝えると、「例えばどのような感じですか?」、「こういうような例ですね?」と言うように、具体例を求められることが多かった。私は当初これに困惑してしまい、なかなか意見を上手く伝えることが出来なかった。私の意見と同じ意見を後から他の方が言ったとき、それが採用されたことが多くあり、自分の伝えなかったことが全く伝わっていないと感じる機会が非常に多かった。

また、圧倒的にディスカッションの時間が長い点にも戸惑った。どちらかという、私が所属する学部では成果主義な点があるため、ディスカッションをするくらいなら、実際に動きながらディスカッションを進めていくことが多いと私は感じている。しかし、天保山班では、椅子に座ってディスカッションする時間が長かった。

さらに、天保山班は、私よりも年上の方が多く、また美術品に詳しい方がいたため、資料名や作者名などの専門用語が飛び交うようなディスカッションが多かった。そして、こだわりが強い方が多く、毎回ディスカッションは白熱して、言葉が強くなってしまっていた。

天保山班でのディスカッションのたびに、もどかしく、ついていけない自分を不甲斐なく感じていた。そこで、私はある程度、展示物が決まった時点で、大阪市史など関西大学図書館にある、天保山、展示する予定の作者の周辺知識を、全て読むことにした。2週間ほどかかったが、知識をつける度に、少しずつディスカッションについていけるようになった。

その時に、私は相手の話を聞くことが大切だと気づいた。天保山班は意見をしっかりと持った方々が多いため、ディスカッションの方向がすぐに戻ってしまうことに気づいた。そして、座って行うディスカッションの時間をもどかしく感じるのではなく、相手を知るための時間だと意識を変えた。さらに、相手の話を聞いて、受け止めてそれを一つずつ紐解いていくことで、自分の意見と混ぜ合わせて伝えることで、メンバーに伝わりやすいのではないかと感じ、実践してみると、成功した。

これを通して、当たり前のことではあるが、相手のことを知ること、相手の話を受け止めること、そして議題に対しての知識を中途半端に身につけるのではなく正確に身につけること、の大切さを改めて感じた。

4. 博物館実習展を通して私が考えたこと

私が所属した天保山班は、年齢、学部、出身地、専門としている分野、全てが異なる人々が一丸となって実習展を完成させることができた。

様々な反省点、後悔したこと、改善すべき点があった。グループの方々、それぞれが考えていること、思うことがあるだろう。しかし、私は自分が持てる力は全て出し切って、今の私が出来る最大限の展示ができたと思う。

私たちのグループは、話し合いの段階で何度も何度もぶつかり合った。議論が白熱しすぎて、展示する資料、レイアウト、キャプション内容など決めるべきことがなかなか決まらず、前に進めることが出来なかった。しかし、議論が白熱して、その上で決めたことだからこそ、様々な意味を込めたメッセージ性の強いものに仕上げられたと思う。また、担当はある程度決めていたが、担当者は初めの原案を作ることを担い、そこから先は全員の

ディスカッションで決めていたため、専門的な知識が足りないこと、展示の経験が全くないことなど、知らないこと、経験のないことを作り上げていく中で、グループのメンバー、それぞれがもつバックグラウンドを最大限に活かせたと思う。

博物館実習展を通して、自分の意見を正確に伝えることの大切さ、スケジュール管理の大切さ、個人に物事を伝えることと不特定多数の方に伝えることの違い、専門的な知識の必要性、コミュニケーション能力、など私自身に不足していることを様々経験することが出来た。

学芸員課程を受けなければ出来なかった経験で、初めから企画を作る楽しさを感じることができ、1年を通して非常に濃い時間を過ごすことが出来たと感じている。

さいごに、先生方をはじめとし、1年間ご指導いただいた方々、そして天保山班のメンバーに心からお礼を申し上げて終わりしたいと思います。ありがとうございました。